1977年12月3日第三種郵便物認可（毎月18回1、2、3、5、6、7の日発行）2025年7月22日発行　SSKP通巻第8742号　ばんび小屋だより133号

SSKPばんび小屋だより No.133

ホームページ http://neno-net2.com

2025年度総会と懇親会に30名が参加！！

～懇親会でのヴァイオリン演奏に、会場が魅了！～

2025年６月15日、2025年度同窓会総会と懇親会が、センター本館３階大会議室で開催されました。今回は６年振りに飲食ありの懇親会が開催出来るという事で、併せて30名の皆様が参加して下さるという事が事前に判明しており、幹事一同、楽しみにしておりました。総会は村上さんの司会で始まり、岩井会長の挨拶。続いて議長選出に移り、幹事会推薦の村上さんが承認され、議事が開始されました。

村上祥子さん。

岩井会長。

佐々木卓司さん。

佐々木事務局長の「議決権数の確認」で総会成立が確認。続いて各部の担当者（事務局は佐々木さん、企画部も佐々木さんが代行、情宣部は会報が恒石さん、ネットが村上さん）より、2024年度の各部報告と2025年度の活動方針案が報告。会計報告（決算報告と予算案）が会計・佐々木さんより、会計監査報告が監査・田村さんよりされました。その後、各部報告と活動方針案、決算報告・予算案に対する質疑応答、活動報告と活動方針案、決算報告・予算案に対する採決が行われ、満場一致で承認。これで、予定されていた総会の議事は、全て終了しました。

ここで、懇親会の為の会場設営が行われ、参加者全員での懇親会が始まりました。冒頭、３月14日に急逝された谷内副会長を偲んで、田村惠一さんが想い出を語り、彼が好きだった『黒霧島』で献杯。参加者全員で谷さんを偲びました。2019年以来の「いさみ屋」さんの和風懐石弁当はとってもボリューミーで、中々食べ応えがあり、正直、やっとの

写真左上は当日の昼食。写真右下は懇親会会場全景。

待ちに待った、６年振りに開催された「飲食ありの懇親会」に参加して下さった皆さん。

同窓会総会及び懇親会でのスナップ写真です。【１段目】みづきさんのヴァイオリン演奏。素晴らしい演奏に聴き入る参加者の皆さん。青柳勝久さん。青柳溥子さん。阿部栄子さん。天野誠一郎さん。石田太郎さん。【２段目】伊藤奈緒美さん。内田二三子さん。大小島健さん。吉田和男さん。小原昭子さん。加藤昌子さん。酒井重雄さん、塩尻輝雄さん。【３段目】須田和夫さん。谷内せつ子さん。田村惠一さん。田村和子さん。橋本純子さん。村上満知子さん。山崎裕康さん。山本雅常さん。

思いで食べました。昼食後は少し休憩をして、余計なテーブル等を移動し、会場を演奏会に向けてセッティング。いよいよ「みづきさんのヴァイオリン演奏」の開演です。

演奏された曲目は、①サン=サーンス作曲「謝肉祭」より『白鳥』。②シャミナード作曲『カプリッチョ』。③サラサーテ作曲「スペイン舞曲集」より『プラジェーラ』。④サラサーテ作曲『ツィゴイネルワイゼン』の４曲でした。特に４曲目の『ツィゴイネルワイゼン』は正に超絶技巧の演奏で、参加者の皆さんが演奏を堪能された事と思います。

みづきさんのヴァイオリン演奏風景（全身）。

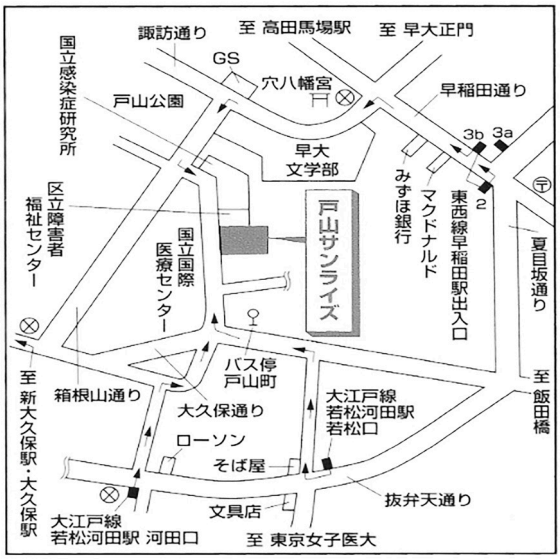
「アンコール曲」は、昭和の歌姫・美空ひばりの名曲『川の流れのように』でした。しっとりとしたヴァイオリンの音色が素敵でした。

今回の同窓会総会＆懇親会には、1970年代に桐が丘養護学校で教師をされていた久本麗子さんより「自分の書いた本を皆様に読んで頂きたい」という事で、『フーガな陽だまり』（A5判48ページ、「印刷に関するお手伝い」は恒石が担当。）という御本を30冊ご寄付頂きましたので、参加者の皆様に配布させて頂きました。

また、谷吉弘次さんからは、「自分の製作した弦楽四重奏の木製人形を、お二人にプレゼントして欲しい。同窓生にも６セットプレゼントしたい」との事で、私がお預かりして来ましたので、今回のイベントで仲介の労を取って頂いた株式会社effeの納原社長とみづきさんにプレゼントさせて頂きました。谷吉さん、木製人形は、確かにお渡ししましたよ～。（恒石記）

みづきさんは、演奏活動の傍らTikTokやYouTubeで、「水月りょう」というハンドルネームで、「ヴァイオリン演奏などの動画」を配信しておられます。スマホやパソコンをお持ちの皆様は、是非とも「視聴」をお願い致します！多くの皆さんが視聴される事で、みづきさんに還元されますので！

今年の旅行も『戸山サンライズ』に現地集合・解散 みんなで「楽しい夜」を過ごしましょう！



昨今の物価高のためにバス代も高騰し、旅行に来られる同窓生も高齢化して、参加者も少なくなり、リフトバスを借りての旅行が出来なくなってしまいました。

でも、「みんなと泊りがけで楽しみたい！」という事で、2023年から始めた、「現地集合型の都内のホテル旅行」も、今回で３回目となります。

今年は、昨年も利用した障害者用のホテルとして歴史が長い『戸山サンライズ』にツインベッドルーム13室（26名分）を確保しました。ここはベッドの高さが床からわずか40cmですので、ほとんどの車椅子利用者にも対応可能です。ただ、諸経費高騰のため、ホテル料金もかなり改定され、昨年よりも高くなりましたが、皆さんとの集まりを是非とも続けていきたいので、下記の要領で実施することに致します。

懐かしい想い出話や、暮らしの中の耳寄りな話、そんな楽しい時間を過ごす夜を、今年も作ることができれば幸いです。

是非とも、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

昨年同様、「宿泊はしないけれど、パーティーだけに参加する」ことも可能です。

参加ご希望の方は、同封の返信葉書でお申込み下さい。

多くの皆様のご参加を、お待ちしています。

開催日時：2025年９月27日（土曜日）～９月28日（日曜日）

開催場所：戸山サンライズ（全国障害者総合福祉センター）
東京都新宿区戸山１丁目22番１号　電話：03-3204-3621

アクセス：新宿からタクシー（約2,600円以内）
都営大江戸線「若松河田駅」下車、徒歩10分

駐　車　場：14台が駐車可能（無料）　　**宿泊受付：**９月27日午後４時より

パーティー：９月27日（土曜日）午後６時30分より、１階レストラン

宿泊定員：大人26名（お子さんは親御さんと同じベッドを使用。）

参加費用：宿泊とパーティー：大人１名：11,000円（介助者も同額です。）
：子供１名：4,500円（小学生以下）
パーティーのみの参加：大人１名：5,000円

申込方法：同封の返信葉書でお申込み下さい（**８月31日必着**）。

お問合せ：事務局・佐々木卓司（電話：080-3343-9765）

「整肢療護園での８年10か月」を振り返って

三浦　眞二

はじめに

37年間の東京都勤務を終え、早いもので３年が過ぎた。65歳までは働きたいと思っていたが、63歳の秋に突然、心肺機能不全に陥り、生死の淵を彷徨った。

神様が「まだ生きよ！」ということなのか、一命はとりとめたが、「慢性呼吸不全」という、予期せぬ第二の障害を負い、医師からは自動車の運転禁止と電動車椅子を常用し、東京都の仕事も辞めるように言われ、それまでの生活スタイルを変えることになった。これまで「仕事第一の生活」を選択してきた私であるが、『終活』を考えるようになり、その一つとして、「自分史」を書き始めた。こんな形で自分の人生を振り返った時に、「療護園時代の月日は、私の人生の礎になっている」と感じた。稚拙な文章で記憶違いもあると思うが、書き進めている「自分史」の中の、療護園時代を「思い出の１ページ」として、寄稿させていただくことにした。皆様にとって、「息抜きのひと時」になれば、幸いである。

＜自分史＞

いつ頃だっただろうか。パソコンで何気なく「整肢療護園」と打ち込み、Enterキーを押してみた。すると「同窓会　根の上Network」のホームページに出会った。その瞬間に、私の記憶は50有余年の時間を遡ることになり、何のためらいもなく同窓会に入った。そして、整肢療護園同窓会記念誌「おせんち山」が送られてきて、その時代にタイムスリップした。そこには、「互励（ごれい）会」や「音楽運動会」といった文字や、懐かしい名前・写真の数々、どれも「私の原点」であった。

私は、1958年11月に島根県で次男として生まれた。両親からよく聞かされていた、当時の私の状態は、おむつを替えるたびに泣き続けるので、おかしいと思って病院で診てもらった所、レントゲンに微かに写る骨が折れていた。病名は「先天性四肢変形骨形成不全症」と診断された。両親は故郷を後にして、私を東京で、治療と教育を受けさせることを決断した。

1965年５月、６歳の私は整肢療護園のⅡ病棟に入園した。入園日の記憶で未だにはっきりと覚えているのは、両親が私を残して帰ろうとした時に、私は泣きじゃくりながら病室の床を這って、両親の後ろ姿を追った事である。それから、８年10か月に及ぶ入園生活が続くことになる。園での生活は、治療と教育、職能訓練を柱に、日課が決められていた。私の難病、「骨形成不全症」は一般的に、骨がある程度形成されるのは15歳位だと聞かされていた。幼少期は、骨折と手術の繰り返しであった。それでも両親は、私が歩けるようになる事を信じて疑わなかったのか、ひたすら辛抱と忍耐を言い続けていた。

小学部の低学年の頃、園には同じ年頃の「サリドマイド児」の子供たちが入園していた。もちろん私には、自分とは異なった障害のある仲間でしかなく、両足で器用に日常生活を難なくこなす姿が、当たり前のように映っていた。彼らが青年期になった頃、社会参加の様子がメディアで紹介され、私はサリドマイドが薬害であることを知り、同じ先天性障害ではあるが、自分の障害とは決して一括りにはできないと思った。

1960年代半ば（昭和40年初頭）の日本の障害者福祉施策は、後に「施設収容型」と言われた。確かに療護園での生活は集団生活で、日課が分刻みで決められ、自宅に帰れるのは盆と暮れのみ。原則日常的な外出は禁止で、面会日に親と近くの

書店や文房具店などに行くことや、病棟ごとのグループワークで外出するくらいであった。

正確な時期は覚えていないが、ボーリングが1970年代に日本中で大ブームになっていた頃、先輩に誘われて、当時池袋にあった「ハタボウリングセンター」に、数名の有志で早朝ボーリングに出かけた。早朝ボーリングの開始時刻は6時からだったと思うが、それに間に合うように、数名の有志達は、禁じられていた「無断外出」を決行した。

園の門を出る頃はまだ薄暗かった。時期は空を見上げれば、星が瞬いていたのを覚えているので、空気が澄んでいる季節だったと思う。

私は中学生になったばかりで、ひたすら先輩たちに遅れない様に、小さな車椅子の車輪を回していた。今、園からボーリング場までの距離を測ってみると、片道3キロ弱であったが、全員が完走し、国民的ブームであったボーリングを初めて体験した。

「人生楽あれば苦あり」とはよく言ったもので、皆が満足感に浸り帰路に着こうとしたその瞬間、園の正門の前で腕組をして、仁王立ちしている男性児童指導員を見ることになった。その姿がだんだんと大きくなり、私たちを待ち構えていたと知るや、「無断外出」という4文字が頭をよぎり、その後、どうなったかは想像に難くない。

今でいう「処分」がどういうものであったのかは記憶にないが、「強制退園」にはならなかったことだけは確かである。

この無断外出は、決まりを破ったということでは反省すべきことであったが、私の将来にとっては、大きな財産となった。

園のもう一つのご法度といえば「内食（ないしょく）、外から持ち込んだ食物をこっそり食すること。）」であった。食べ物に関しては園の食事とおやつしか認められず、外から持ち込んで食べることは認められていなかった。この内食という字からわかる通り、「内」と「外」の世界観がにじみ出ている。

園の夕食は、夕方4時から5時頃ではなかったかと思う。食事を作ってくれている調理員さんたちの勤務条件に思いが及ぶ訳もなく、「なんでこんな早い時間に食べなければならないのだ！」と不満を口にし、ひたすら長い夜の空腹感を満たす術を考えていた。このことは、「内食」禁止というご法度破りにつながっていき、今では考えられないような行動に出た。

その行動の一つで、仲間内で流行っていた、ラーメン作りを紹介する。

ポイントは少年雑誌の通販にあった、100Vのコンセントで簡単にお湯を沸かせる「小さな器具」（形は「T字」で、先っぽが「らせん状」になっている）である。水を入れた容器にこの器具を入れて、プラグをコンセントに入れると、数分間でお湯が沸くという優れ物であった。

―ご法度ラーメンレシピ―

＜用意するもの＞

1　インスタントラーメン（所謂「袋麺」）

2　鉄製の洗面器（使用中のものはよく洗うこと）

3　鉛筆2本（新品が望ましい）

＜手　順＞

鉄製の洗面器に適当な量の水を入れ、湯沸かし器具で沸騰させる。→インスタントラーメンの袋から麺を取り出し、お湯の中に入れる。→用意した鉛筆で麺をほぐす。→麺がほぐれたところで粉末スープを入れ、鉛筆でかき回したところで、出来上がり。

＜留意点＞

1　匂いを拡散させない（＝場所を選ぶ）こと。

2　麺はよく噛むこと。

3　洗面器でスープを飲むと、口の縁からこぼれるので、ストローを使うと良い。

園の食事で「ラーメン」が出ることはなかったので、このご法度ラーメンは、正に「5つ星のご馳走」だった。

とは言え、インスタントラーメンは煮るものであるので、出来上がりがどんなものであったかは、皆様のご想像の通りである。その後、タッパウェアなるものを知り、ご法度ラーメンの質が格段に向上した頃、「美味しさは世界の言葉」というキャッチフレーズで、日清食品の「カップラーメン」が登場した。それは、私たちの「ご法度ラーメン」のアイディアを、日清食品が盗んだかの様な発想で製品化されていたが、味や質は、正に異次元の物であった。

人間の欲とは、限りがないものである。格段に進化したカップラーメンから、本物のラーメンを食べるための「術」を考えた。

隣接する桐が丘養護学校入院部に通じる門を出たところに、小さなラーメン屋さん（確か店名は「味楽」）があった。盆や暮れの外泊から園に戻る時に、家族と食事をした所であるが、この店のラーメンと餃子の味、そして店主ご夫婦は忘れられない。

なぜ味のみならず、店主も忘れられないかというと、「電話で注文すると、一人前でも出前してくれた」のである。もちろん病室に出前してもらうほどの勇気はなく、園の敷地内の建物の外の、目立たない場所を告げると、なんと店主はそこまで出前してくれたのである。時間は夕方頃であったと思う。時には仲間数人と暗闇迫る頃、狭い建物の陰でお金を払い、内食への罪悪感はどこ吹く風で、ラーメン屋さんのラーメンをすすり、熱々の餃子をフーフーしながら食したが、舌をやけどした記憶があるので、やはり「見つかってはいけない」という罪の意識は多少あった様である。

長期入園者にとって、成長すればするほど園の生活に閉塞感はあったが、幼児期から少年期への成長過程において、健常な子供たちと同じように子供の遊びや学びの時間を過ごすことができた。

戦後、再建された病棟の建物の２階には、避難用スロープ（すべり台）を備えた広いベランダがあり、そこで私は車椅子での缶蹴りや駆けっこなどに、日が暮れるまで興じた。今思えば、遊びの中で競い合い、車椅子の操作技術を身につけていた。園では、「音楽運動会」や「互励会（舞台発表会）」の二大行事に加えて、「七夕」や「クリスマス会」などの、季節の行事が行われていた。

病棟では熱帯魚や小鳥を飼育し、どんな生き物でも生命の誕生から終焉までの営みがあることを体験し、生命の大切さを学んだ。ベッドの上では、電気ハンダゴテを使い、ゲルマニウムラジオを製作した。この小さな興味・関心は、後に、アマチュア無線で世界の人と交信できる喜びにつながった。病棟の壁には、「月刊平凡」や「月刊明星」の付録だった、アイドルのポスターを貼ることができた。

年長の女子が、グループサウンズの解散コンサートをテレビで観ながら、涙している様子が、不思議でならなかった。テレビは病棟に１台しかなく、決められた時間に、みんなの多数決で決めた番組を観ることになっていた。民主主義の原理も学んでいたようである。

今になって思えば、整肢療護園の生活は、閉鎖的ではあったが、人格形成、退園後の社会参加への礎となる生活を体験した。

私は、こうした環境で人間性を育み、社会への扉を打ち破ろうというエネルギーを得ることができた。

整肢療護園の創立者である、故高木憲次博士が唱えた『療育の理念』には、「治療」と「教育」の他に「職能訓練」（名称は「職能棟」）があり、木工や印刷、編み物といった、手に職をつける為のプログラムがあった。この理念は、後に障害者職業訓練校に発展していったのではないかと思う。職能訓練での私の記憶はと言えば、当時「印刷」や「木工」を指導してくれた先生の厳しさ、活字を組んで輪転機を回した時の音やインクの匂い、木工で使用する木材の香りである。

当時、障害者の社会参加などという言葉を聞くことはなかったが、皆、心の中で「自立」を目指

していたのではないだろうか。

私の四肢機能障害の原因となった「先天性骨形成不全症（現在は難病指定）」は、幼少期は骨が折れやすく、1年のほとんどを、ベッドでの寝たきりの状態にあることが多かった。

私は病気を理由に小学校入学が1年間猶予され、整肢療護園に入園後、「東京教育大学附属桐が丘養護学校」（現：筑波大学附属桐が丘特別支援学校）に入学した。

桐が丘養護学校は、通学部（寄宿舎生含む）と療護園に併設された入院部（現・施設併設学級）に分かれていた。大きな違いは、当時は入院部には高等部がなかった事。校舎はそれぞれ離れた敷地にあり、同じ学校名ではあったが、感覚的には独立した学校であった。当時の交流の記憶と言えば、卒業式に通学部に行くことくらいであった。

私は入院部に小学部の6年間と、療護園を退園することになった中学部2年まで在学した。入学当初の入院部の校舎は平屋の木造で、廊下や教室の床の油の匂いと、コークスのストーブが印象に残っているが、教室で皆と授業を受けられるようになったのは、小学部高学年になってからである。アルバムを開くと、入学式の私は「ストレッチャー」に寝た姿で写っている。

寝たきりの私は治療が優先で、週何回か先生が病室に来て行う、「ベッドサイド授業」が中心であった。また、病室には教室の授業の映像（たぶん静止画像だったと思う）と、音声がつながれているテレビがあった。高学年の人はマイク付きのヘッドフォンを付けて、このテレビ授業で、病室にいながらにして、教室同様の授業を受けることができた。1960年代にこのような教育が実践されていたことは、当時の桐が丘養護学校は、先進的な環境にあったのではないかと思う。

私はこの桐が丘養護学校で授業時間数は少なく、学習進度は遅れていたが、「自立に向けた考え方」を学んだ。技術・家庭の授業は、自分のハンディをハンディとしないためのアイディアを考えることから始めて、それを具体化する物を製作し、日常生活の利便性の向上を図るというものであった。

私は身長が低く、車椅子の大きさも、身体に合わせて小さかった。養護学校の高さの低い黒板でも、手の届かない面積の方が広かった。私はそんな黒板の不便さを解消するため、長尺の棒の先にチョークや黒板消しを取り付けることを考え、授業で製作した。大発明でも何でもない、ちょっとした工夫であるが、今まで出来なかった事が出来るようになることの喜びが、自立への自信につながった。これまでの人生において、このような発想の転換で、どれだけの不可能を可能にできただろうか。

大学生時代に借家で一人暮らしをした時に、洗濯物を干すには物干し台が高く、さてどうしようかと考え、思いついたのが滑車とロープを利用し、洗濯ばさみのついたハンガーを上下できる構造を、物干し台に加えた。

私の両肘の関節は曲がりが悪く、ワイシャツの襟首のボタンまで手が届かず、自力ではボタンが留められなかった。私のこのような腕の障害は、就職をしてスーツを着る際に、ネクタイも結べないことに直面した。毎日のことであり、何とか一人でできないものかと思案した結果、ワイシャツを着る前の状態でネクタイを結び、形を作り、頭からワイシャツが被れる余裕を残してボタンを留め、セーターを着るように頭から被ることで解決できた。もちろん襟首のボタンはできなかったが、ネクタイを30センチの物差しを使って、締め上げることで形になった。これも発想の転換がなし得た結果であるし、チャレンジの姿勢が当たり前になっていたから、可能になったことではないかと思う。

桐が丘での体育の授業では、車椅子で野球、卓球、バドミントン、バスケットボールなどの球技に挑戦することが出来た。中でもホッケー（スティックはバドミントンのラケット、ボールは軟式

テニスで使用する軟球を使用）は、団体戦ということもあり、車椅子でのスピード感とぶつかり合いが、否応なく闘争心を駆り立て、好きな種目の一つであった。もう一つ夢中になった「卓球」が、社会人になってからの生活の大きな柱になるとは、この時は思いもしなかった。桐が丘養護学校の生徒会活動は、自分達の「進路」を考えることが中心であった。1970年代、車いす使用者に対するタクシーによる乗車拒否が社会問題化していた頃、私は文化祭のクラス発表として、この問題を取り上げた。街に出て、障害者の社会参加についてインタビューを行い、声をまとめ、社会との接点を考えるというものだったと記憶している。内容としては稚拙なものであったが、このような主体的な活動を通して、まだ中学生であった私の「自立心」は、確実に向上した。

また、「桐が丘養護学校」には、車椅子で「都立高校」や「国立大学の教育学部」に進んだ先輩たちがいた。このことは私の将来に大きな刺激になったが、一方で、自らの人生に終止符を打った仲間もいたことは忘れられない。

私の療護園での治療は、数十回の骨折と手術を繰り返し、補装具を着けて歩行訓練を行うこともあったが、実用的にはならなかった。むしろ車椅子での生活に自信を持っていた。障害が固定したということなのか、これ以上の治療がなくなったのか、８年10か月の時を過ごした療護園を、退園することになった。また、同時に桐が丘養護学校も中学２年を修了して、転校することになる。

思えばこの療護園・桐が丘で学び、経験したことは、決して閉鎖的な空間での出来事ではなく、健常な子供たちと同じような成長過程を得たと思っているし、療育施設ゆえの生活体験は、「特別な糧」になっていることも事実である。例えば年齢差のある集団生活は、コミュニケーション能力を高めたこと、仲間の様々な障害特性を知り、友情を育めたことなど、かけがえのない経験が、私の「人生の土台」を築いた。

1974年３月に療護園を退園し、実家のある山梨県での「新たな生活」が始まった。

「僅か５年の命」を10倍にも伸ばした『静』

堀江　洋子

娘・静（シズカ）が逝って、８年になります。この度、恒石様よりの『ぼんび小屋だより』への原稿依頼のお手紙を戴き、拙い文章を書かせて戴く事となりました。小学生の作文の様な散文になる事を、ご勘弁頂きたいと存じます。

『ぼんび小屋だより』132号で谷内澄幸様の急逝を知り、心よりの御冥福をお祈り申し上げます。いつも園でお会いする度に、ニコニコとしながら声を掛けて下さいました。最後に園の廊下でお会いした時も、笑顔で「堀江さんもそろそろ、原稿を書いてもいいんじゃないですか？」と言われて、「いやぁ、とてもとても」とお答えした事が、まるで昨日の事の様に思い出されます。

今回の原稿依頼に際して、「もしかして、谷内さんはあの時、私に対して本気で言って下さっていたのかしら？」と、ハッとしました。そして「これはお断り出来ないな」と、覚悟しました。しかしいざ書こうと思うと、書き出しが掴めないのです。破茶滅茶な文章になりました。『ぼんび小屋だより』をいつも拝読させて戴き、泣いたり笑ったり、骨身に染みる原稿ばかりですが、私の場合は自分の娘の事なので、「親としてやって来た事」を、有りの儘に書く事に致します。

娘は、1966年７月10日に、駒込の個人産科医院で産まれました。近所でも評判の良い医院でしたが、私が入院したのは主人の仕事の都合で、静が産まれる直前に三鷹市から駒込に引越し、自宅か

在りし日の堀江静（シズカ）さん。

ら一番近かったので、この医院に決めたのでした。私は１度だけ院長先生の検診を受け、その後入院しました。後で分かった事なのですが、実は私が入院した時には院長先生は既に癌で亡くなられていたのです。その事を医院では内緒にしていて、助産師と看護婦さんだけでは急な対応が出来なかった状態だった様です。手術中、「難産で時間がかかり、吸引も手術も出来ない！」と二人が話しているのが聞こえました。静は脳性麻痺で、泣きもせず、『真っ白な人形』の様な美しい顔で、私が「男の子ですか？女の子ですか？」と聞いた時も、看護婦さんに「生きるか死ぬかの時に、そんな事は後よ！」と、凄い声で怒られたのを忘れられません。

こんな事、今なら大変な事になります。運が悪かったのだと思い、がっかりしたり悲しんだりはなく、「赤ちゃんてこんなものかな？」くらいでした。それからが大変でした。静は母乳を吸う力が無くて飲めないし、ミルクも哺乳瓶を吸う事が出来ない。結局、ミルクは「スポイト」で１滴ずつ口に入れてやるしか、方法がありませんでした。

しかし「生命力」だけは、本当に素晴らしかった。いつまでも首は座らない、毎月、月の半分は高熱を出して、「今夜中に熱が下がらなければ入院です」と言われても、肺炎にもならず、必ずその夜の内に熱は下がる。近所の小児科に紹介されて、広尾の愛育病院には、よく通いました。内藤先生の診察は１日15人だけでしたので、朝早くから並んで番号札を取りに行き、番号札を持って、改めて静を診察に連れて行くのでした。

離乳食にも、とても苦労しました。「おかゆ」や「おじや」等を食べさせても全部吐いてしまい、見向きもせず、全く食べてくれません。食べてくれるのは「イチゴのショートケーキ」。「モンブラン」は大嫌い。「鰻の蒲焼」は大好きで、あの頃は近所にはコンビニ等はなかったから、「イチゴのショートケーキ」も「鰻の蒲焼」も、巣鴨の地蔵通りまで、毎日買いに行き、月末になると、私のお財布はいつも「空っぽ」。質屋通いも随分しましたね。夜寝ないで大泣きするので、夜明け前の薄暗い『都立染井霊園』を、静を背負って毎晩歩きました。

静が３歳になる前に駒込から三鷹台に戻り、アパートの大家さんが近くにプールを開いたのを機に、午前中のお客の少ない時間帯に、６月から９月末まで毎日、雨の日も風の日も、静を連れてプール通いをしました。その頃通い始めた世田谷区の『重症心身障害児センター』の、故大坪先生に、「お母さん、この子は５歳まで生きられませんよ」と言われたのがきっかけで、「どうせ５歳までの命ならば、何でもやってやろう！」と、強く私が思ったからです。

相変わらず毎月高熱は出すし、「イチゴのショートケーキ」、「鰻の蒲焼」、「寿司」と、静が食べたい物だけ食べてプール通い。「この子は５歳までに一生分の贅沢をして、障害児に産んでしまった親を泣かせるつもりか」と呆れましたが、毎日プールに通う様になったら、毎月の高熱がピタリと止まり、風邪も引かなくなりました。浮輪の中で足を動かしてキャッキャと笑い、表情が豊かになりました。荒療治が見事にはまったのかも知れません。この後、静の「喰い道楽」は収まり、美味しい物は何でも食べる様になり、世田谷まで週に１回通うのも、電車が好きで、私の背中で喜んで、音楽会、盆踊り、灯籠流し、旅行、前進座の芝居まで、５年間で出来るだけの事をやりながら、「自分の意志をハッキリと顔に出す子」に育っていきました。

小学校は訪問学級が初めて出来た年で、１年生の１学期は担任の窪田先生が「お母さん、訪問学級で家にいるのでは駄目だ。学校へ連れて行く。世の中の刺激に触れさせないと、子供は育ちません！」

と、御自分の車で送り迎えをして、連れて行って下さいました。三鷹第６小学校の障害児学級「ふじみ学級」の中に訪問学級も１クラスとして認めてもらう様にと、先生にお尻を叩かれて、他の先生や介護の保母さん、あと２人の子供のお母さんと、３日間で３千人余の署名を集め、それを持って三鷹市や東京都への陳情で、議員会館等にも行きました（当時の都知事は美濃部知事）。母親２人の気迫が通じたのかも（もちろん、後押しをして下さった大勢の方達のお蔭様です）。

そして２学期からは、静は併設された「ふじみ学級」の１クラスに仲間入り出来て、毎日通学バスで学校に通う事になりました。中学は三鷹第１中学校に、一般の子供達と一緒に、運動会や修学旅行にも参加させてもらいました。因みに、静が卒業した後、三鷹第６小学校の「ふじみ学級」は開店休業状態となり、特別学級は廃止となり、みんな養護学校に行く様になったそうです。

静も高校は府中養護学校に行きましたが、環境が変わった事に抵抗してか、「朝、家を出てから午後家に帰るまでトイレをしないで、先生を困らせて、家の玄関まで我慢して帰る」という事を長い間繰り返し、病気にならないかと心配しましたが、本人は大好きな地域の学校に戻りたかったのでしょう。おしっこを我慢する事で、「自分の気持ち」を訴えたのだと思います。

その頃、静の下に次女と長男が産まれ、主人とは別居。私は「自分の店」を持って、３人の子供を育てておりました。

『全国重症心身障害児を守る会』には入っており、北浦会長や他の皆様の後ろについて議員会館等の陳情に静を背負って行ったりしておりましたので、この時も只の「見学」位に思っておりました。高円寺からバスに乗って小竹向原へ。『むらさき愛育園』に着いて、特に見学も説明もなく、昔の古い西棟に連れて行かれ、直ぐに千葉婦長さんに恐い顔で、「それでいつから入所されますか？」と、いきなり言われた時には、何がなんだか、どうなっているのか、分かりませんでした。

きっと私を連れて行って下さった福祉課の方が、事前に私に話したら断ると思って、私に内緒で手配して下さったものと思われます。ポカンとしている私に、婦長さんが重ねて「なるべく早く来て下さい！」と言われ、我に返りました。入所など思った事はなかったし、先ず、心の準備が全くない。思わず「はい」と吊られて返事をしたら、見事にスラスラと事は進み、５月末には静の入所が決まっていました。

事前に説明や話を役所の方がなさらなかったのは、私を迷わさずに静を手離す事が出来る様に、という御配慮だったと思われます。そして静は、西棟に入所しました。余りにも急で、その後の私の膝と背中の淋しさ、寒さは心に染みて、週に３日は『むらさき愛育園』に通い、衣類等のたたみや入浴の手伝い等をして、スタッフの方達に「お母さん、そんなに来なくていいですよ」と笑われました。

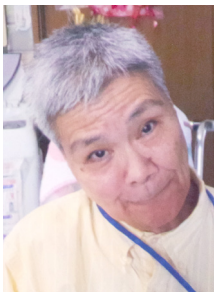
当の静はというと、３日間位は泣いた様ですが、すぐに馴れて、楽しい毎日になった様子でした。「府中養護学校高等部の卒業式」も、「三鷹市の成人式」も西棟から出席して、「弟の結婚式」にも出させて戴きました。本当に『むらさき愛育園』の皆様、『整肢療護園』の皆様のお陰様で、静は思う存分自身の青春を、人生を謳歌して、３歳の頃に医師に言われた「僅か５年の命」を、10倍にも伸ばしたのです。それは一重に、大勢の皆様のお力による賜物と、感謝申し上げる事しか出来ません。

親を一人前に成長させて、静は2018年12月２日、美しい顔で永遠の眠りにつきました。産まれて来た時と同じ、本当に美しい顔で。棺には真っ赤なパンプスを履いて、花より団子という顔で、鰻やケーキ、上等の和牛まで入れて、いい匂いの中を旅立った事で、静らしいお別れでした。静は本当に「人」に恵まれました。お世話になりました沢山の方々に、心より、ありがとうございました。

「車椅子　押さるる秋思　押すもまた」　堀江

私が結婚をOKしなかった、本当の理由

有(ある)賀　俊子



私は1955年に、東京都中野区で生まれました。身体が弱かったという事で、埼玉県川越市に転居。1歳になっても首が全く安定しないので、おかしいのではないか？と、病院に行く事になったそうです。私の母が偶然、東武東上線の電車の中で、子供さんが整肢療護園に入園しているお母さんと知り合いになって、整肢療護園の事を知ったの。早速診察に行った時に診察して下さったのが五味先生で、診断は「脳性麻痺」だった。それから定期的に五味先生の診察に通う様になって、リハビリをして貰う事になったの。「とにかく身体を暖める事と、とにかく手足を動かして下さい！」という指示があったみたい。我が家にはお風呂がなかったので、母は私を毎日、銭湯に連れて行ってくれたみたい。その効果か、少しずつ「ハイハイ」が出来る様になったみたい。私の両親は死ぬまで五味先生の事を崇拝していました。

小学校に上がる歳になった時、私は知的レベルが結構高かったので、教育委員会の方からも「お母さんが一緒に学校に付き添って下されば、普通学級に通えますよ」と言われたらしいけど、「うちにはそんな余裕はありません！」と断ってしまったみたい。結局、寄居町に出来た『埼玉療育園』に入園する事になったけど、何しろまだ歩く事が出来なかったので、「ギャン泣き」した事を覚えている。でも私が泣いても誰にも構って貰えず、夜勤の看護婦さんから「何を泣いているのヨ」みたいに、冷たく言われたのを覚えている。初めて親元から離れて暮らす事の寂しさを実感した、入園1日目だった。2週間後、両親が初めて面会に来てくれたんだけど、その時に私が歩いているのを見てとても驚いて、改めて「家から離して良かった」と言っていたわね。どうして歩ける様になったのかというと、特に訓練をした訳でもなく、園での毎日の生活の中で「食事が食べたかったら、何が何でもそこまで移動しなければならない」という事が大きかったかな。だって、誰も助けてくれないから。療育園には6年生の途中までいたけれど、仲の良かった女の子が整肢療護園に移ったという事で、「私も整肢療護園に移りたい！ここにいたらダメになっちゃう！」と両親に訴え続けて、やっと移る事が出来たの。後で分かった事だけど、ちょうど退園する子が多くて、空きが出来た事が幸いしたみたい。実はうちの旦那（3歳下、障害はポリオ）もその頃に整肢療護園に入園しているの。整肢療護園に移ってとても感じた事があって、療育園に較べると段違いに「専門職のスタッフ」がいるという事実。「本当に整肢療護園に移れて良かったなー」と感じたの。

整肢療護園に入園したのは1967年5月、桐が丘養護学校にも入学したけど、学力テストをしたら少し点数が不足してしまい、本当は小学6年なのだけれど、小学5年をもう一度やることになってしまったの。担任は音楽の渡辺先生で、凄く綺麗な先生だった。桐が丘の創立10周年の年に校歌を作曲された先生。ちょうど吉村（現田村）和子さんが入職された頃で、Ⅰ病棟（1階）の一番奥、職能棟近くの15号室で、小学3年から中学2年までの女子12名の部屋、吉村さんが担当だった。

1969年3月に整肢療護園を退園して、埼玉県で初めての県立養護学校が熊谷市に出来た、そこの中学部（寄宿舎も完備）に入ったの。でもその中学部は「障害児は1日でも早く社会に出るべきだ」みたいな考え方の学校で、中学生なのに「職場体験」とかがあって、私には全く合わなかった。だって先生から「有賀さんは中学を出たら就職した方がいい」みたいな事を言われるなんて、信じられなかったの。

という事で、桐が丘養護学校の高等部（通学部）を受験する事にしたの。入学試験の時には面接もあっ

て、「どうしてこの学校を選びましたか？」という質問に、「私は高校生活だけは、絶対に普通の高校生の生活を送りたいと思っていて、それにはここしかないと思って来ました」と、訴えました。正直、学力的には優れていなかったので、この面接の答えが良かったのではないかと、今でも思っているの。桐が丘の高等部は努力すれば大学への進学も可能だし、実際に先輩にはそういう人もいたので。自宅から電車とスクールバスで通うのは、とても大変だった。桐が丘の高等部には寄宿舎はなかったけれど、実は「父母の会」の肝煎りで、グラウンドの端っこに小さなプレハブを建てた「モグリの寄宿舎」があって、私も２年生からの２年間、お世話になったの。

私は高校を卒業した後は、とにかく早く自立して、生きて行きたいと考えていたの。当時、整肢療護園には電話交換手の方が何人もいて（同窓生の先輩である本田順子さんも）、私、結構憧れていたの。吉村さんにお願いして、実際に電話交換手のお仕事を見学させてもらったりしたのね。当時は電話が掛かって来たら点滅する端子に、ジャックを差し込まなければならなかったけれど、これだと私では厳しいかも知れない。でも当時、交換機の型式が「ボタンを押すタイプ」に変更になる時期だったのね。私は「このタイプならば大丈夫かも知れない」と感じたの。

電話交換手になる為には「国家資格」を取らなければならなくて、いくつか養成所があったので自分で色々と探して、自宅から一番近い養成所が池袋にあったの。『日本オペレーター学院』といって、この学院に１か月通えば受験資格が取れる事が分かったの。だから高校３年生の夏休みに１か月通って勉強して、電電公社の試験に合格すれば国家資格が取得出来る事が分かったの。学院に入る為に申込みに行ったら、私が身体障害者（特に「手が不自由ではないか？」と疑われて）である事が分かると、「責任を取れないので駄目です！」と断られてしまった。だから３日間連続で通いました。当時、高校生以上は「学割制度」があったけれど、「私は高校生ですが、学割制度は使いません。正規の授業料をお払いしますから、どうか入れて下さい！」と拝み倒して、入校を許可してもらいました。

実際の授業をするクラスは１クラス40名位いて、様々な状況の人がいたの。正直言って、私は生まれて初めて「一般の人達」との交流をした訳だけど、皆さん本当に優しかった。授業は「学科」と「実技」があって、「学科」はとにかく丸暗記しましたね。私にとっての難関は「実技」の方で、養成所の交換機は古いタイプ（点滅する端子に、ジャックを差し込む方式）だったので、結構苦戦しましたね。でも、クラスメイトがみんなで助けてくれるのよ。「今度は有賀さんの番だから加減してあげてね」みたいにね。

実は、８月末に行われる「国家試験」は「学科」だけで、「実技」はないのね。因みに、私の「学科試験」の点数は、「満点」でした。1974年、桐が丘養護学校の高等部３年の夏休みでした。

国家資格は取得したものの、きちんとした就職先を見つけて就職しなくては、自立して生きて行くことは決して出来ない。しかも1975年の３月になっているのに、まだ就職先は決まっていない。そこで、新宿区の職業安定所の「身体障害者相談コーナー」に相談に行きました。私が電話交換手の国家資格を持っている事、そして電話交換手の仕事をしたいという事を話しました。するとその年配の女性は「有賀さん、では今からご自宅に帰って、私に電話をしてもらえますか？電話交換は電話のお仕事なので、受話器を通したあなたの声とお話ししたいです」と言われました。私はすぐに自宅に帰り、電話を掛けました。すると「有賀さん、そのお話振りならば大丈夫。良いお仕事を探しましょうね」と言って下さいました。その後また電話が来て、「池袋の職業安定所に良いお仕事があるみたいなので、行ってみてください」と教えて下さいました。翌日池袋の職業安定所に行ってみると、「面接日は急で明日なのですが、大丈夫ですか？」という事でした。明日が面接日という事だったけど、実はその足で、清瀬市青葉町にある都立の高齢者施設の「偵察」に行きました。子供の施設に比べたら、やけに寂しい所でしたね。実

は就職の事に関しては、両親には一切話していませんでした。翌日の面接は無事に終わり、無事採用となり、帰宅して母に都立の高齢者施設に就職が決まった事を話すと、母は「お父さん、俊子がどこかの悪い人に騙されているみたいなのよ」なんて言うのですよ。１週間後、両親と一緒に「説明会」に行き、課長から福利厚生の説明を受けた後、私に「これはあくまでも、有賀さんが１週間無事にいられたらの話ですがね。はっはっはっ」と言い、それに対して母が言った「そうでございますね」という言葉が忘れられません！これを聞いた私は、心の中で「何を言ってるんだ、一生いてやらぁ！」と叫びました。

初出勤日は1975年４月７日だったと記憶しています。交換手としての仕事上の苦労は全くなかったけれど、唯一困ったのが「職場での会食でのお酌」かしらね。だって職場では年齢が一番下なので、会食を断る事は結構勇気が必要でしたから。私はお酒が全然飲めないし、緊張すると手を上手く使えないので、上手くお酌する事なんかとても出来ないから。就職と同じ頃に、『東園』（障害者に優しい自動車教習所）に通い始め、1976年に運転免許を取り、車も買いました。これで行動範囲がとても拡がりましたね。実は就職と同時に施設の近くにアパートを借りたいと思って、両親と一緒に不動産屋巡りをしましたが、身体障害者である事を理由に、入居を拒否される事がとても多かったのです。一度なんて、ちゃんと契約をしてアパートに入居したのに、突然退去を要求されて、荷物を自宅まで持ち帰った事もありました。両親も「俊子、これはもう駄目だよ」と諦めようとしていたのですが、その時、施設の上司の方の計らいで、施設の寮が空いているという事で入居させてもらいました。２年後、いつまでも施設の温情に甘えて寮に住むのも申し訳ないなぁと感じて、車が手に入った事もあり、今度は私一人で車を運転して不動産屋を回り、「お部屋を貸してもらえませんか？」とお願いしたら、不動産屋さんも家主さんも好意的に接してくれて、二つ返事でお部屋を貸してくれました。その時「世の中ってこう言うものかしらね？」と感じましたね。２年前に両親と一緒に不動産屋巡りをした時には、きっと「この人、大丈夫かな？」と思われたのかも知れませんね。もしも私に障害がなくて普通の人だったら問題なかったのかも知れないけれど。やっぱり「色眼鏡」で見られていたのかも知れませんね。そして1977年、職場から７kmの所にあるお部屋に引越す事になりました。

1982年、私が27歳になった頃から、高校の頃に一緒だった仲間と「グループ旅行」をする様になり、その中に彼（パートナー）もいたのね。結構若い頃から彼が亡くなるまで一緒に住んでいたけれど、同窓会に行く時にはそんな事は曖（おくび）にも出さないで、「有賀さん」「新井君」と呼び合っていたの。彼は結婚をしたい様だったけれど、私はずっと断っていたの。どうして私が彼と結婚しなかったのか、理由が分かる？私は「有賀（あるが）」という結構珍しい苗字でしょう。もしも私が彼の希望通りに結婚すると「新井俊子」になってしまうじゃない？「新井なんていう、何処にでもある苗字になりたくなかった」というのが、私が結婚しなかった本当の理由なの。同窓生の吉田和男君も、私達二人の事を「仲の良い二人」だとは思っていただろうけど、何十年も同じ家に一緒に暮らしていたなんて、全然知らなかったと思うわ。

新井君はいつも、「結婚しようよ！結婚しようよ！」と言っていたけど、私は決してOKしなかった。私は「子供が出来て人生が変わるのは嫌だった」のね。私の中では「私の子供として産まれたら、その子が可哀想かも知れないな？」みたいな事も感じていたし、「もしも子供を産んだ時に、果たしてその子供が本当に幸福になるだろうか？」みたいな事も考えていたわね。まあ、出来てみないと分からない事だけどね。実は犬をずっと飼っていてね。私達二人にとっては、「その犬が子供みたいな存在だったなぁ」と感じているわね。新井君は2019年に亡くなってしまったので残念だけど、「本当に良い人だったなぁ」と感じています。

（インタビュー・構成：恒石浩志）

幹事会議事録

2025年４月期　定例幹事会議事録

日時　2025年４月24日（木）13～15時。

出席者　岩井会長、（岩井えり子）、（内田さん）、佐々木卓司、田村惠一、恒石浩志、山本雅常。

「ぼんび小屋だより」132号の発送作業を実施。

【議題１】2025年度総会について（６月15日（日））。

幹事の集合時間

10時30分　机はそのまま（懇親会では机を「コの字型」にする）

懇親会での「ヴァイオリン演奏」は、司会者側の正面を「ステージ」として使用する。

最初に、皆と一緒に食事をしてもらい、その後で幹事会室で着替えてもらい、演奏をしてもらう。アンコールを含めて30分ぐらいを予定。

役割分担

総会司会　　村上祥子予定（佐々木が打診）

会　計　　谷内せつ子（岩井えり子）

懇親会司会　山本雅常

乾杯の音頭は参加者の中のOBクラブの方か、田村恵一さんにお願いする。

懇親会の食事について

「いさみ屋」で手配済み（佐々木担当）

お弁当；1,300円（和風懐石弁当と飲み物）

５月中に、内容、飲み物の種類、数量を「いさみ屋」で検討する。

【議題２】副会長について、その他議題。

副会長については幹事の中から互選し、会報で通知すれば良いので、総会で、その事を伝える。

【議題３】「同総会創立70周年」について

記念誌を発行する案などを、総会で話してはどうか。

※総会の返信はがきや感想はがき、また振込用紙で偉い人から来たら、必ず会長の方に連絡してほしい。　　（多目的棟３階会議室）

皆さんの『お便り』から

小学生の頃の「谷内少年」を思い出しました

青柳勝久さん（横浜市）

会報ありがとうございます。開いて見ましたら、同窓会の周年行事で尽力され、またその後の同窓会の活動に惜しみなく労を尽くされた谷内さんの逝去は、早くこの世を去られたと胸を打たれました。ご冥福を祈り、併せて、ご遺族の平穏な生活が一日も早く訪れるよう祈ります。

思い起こせば桐が丘の教師時代、当時小学部５年生の担任だった私は、今の玄関前の芝生を野外教室に、ユニセフから寄贈された望遠鏡の使い方で留めておけば良いのですが、あまりにも優れた日本光学の望遠鏡なので、５年生の学習内容を超えしまい、太陽の黒点観察を実演したのを思い出します。円形の中に黒い像が数粒並んで揺れているのを、熱心に観察された谷内少年の姿を思い出します。車椅子で参加しましたが、意欲的で明るい笑顔が印象的だった。

終わりに、会報117号にある通り、「県知事賞」、「労働大臣賞」の受賞は、同窓会の「誇り」です。

天国で自由に楽しんでください。

大変な「感動」を戴きました！

（「一賛助会員として」との署名あり）

毎号、再読する読み物ばかりですが、今回の132号は、読み応えのある御文が何編も続き、大変な「感動」を戴きました！この様な「感動」と、多くの「学ばされる事のある御文」を、本にされる計画はないのでしょうか！

（編注：2026年度中に**「創立70周年記念誌」**を発行予定でいますので、ご協力をよろしく！）

６月15日、「いっぱいの気持ち」で応援します！

川嶋順蔵さん（横浜市）

2024年の「オータムフェスティバル」への参加が出来ず、済みません。左股に痛みが出てしまい、杖歩行に。

身体に色んなバリアが出来ましたが、心には、広く、「遠くへハバタキタイ様な気分」が、いっぱい詰まっています。

2025年６月15日、「いっぱいの気持ち」で応援します！（川嶋順蔵　79歳）。

元気で行けるのは「奇跡」なのですね

村上祥子さん（江東区）

総会・懇親会に母と二人で参加します。谷内澄幸さんにお会い出来ないのが、寂しいですが、皆さんと想い出話が出来ればと思っています。毎年当たり前に参加出来ていると思っていましたが、元気で行けるのは「奇跡」なのですね。

会の運営をありがとうございます

三浦眞二さん（立川市）

会の運営をありがとうございます。以前、会報の原稿をWordで作成してメールで送信しましたが、届いていないでしょうか？ご確認願います。（編注：ご寄稿をありがとうございました。）

皆様のご健勝をお祈り申し上げます

元井千恵さん（豊島区）

皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

皆様の生活の「アドバイス」が出来ればと

仙波芳江さん（大田区）

いつも大変お世話になり、ありがとうございます。妹（仙波芳江）は、ヘルパーさん達に全介護でお世話になりながらの「独り暮らし」ですが、数年後には介護保険に移行になる年齢で、心配は尽きません。

会報でも、重度の脳性麻痺の障害者の介護保険への移行についての件で、何かアドバイス等あれば、皆様の生活のアドバイスが出来ればと思います。（「姉」より）

いつもありがとう

杉浦淳子さん（熊谷市）

いつもありがとうございます。

体力に自信がなくなり

渋江孝夫さん（相模原市）

体力に自信がなくなってきました。都心まで行く自信がありません。

会報、知った方々の情報を懐かしく思い起こしながら、いつも拝読しています。

優しい笑顔が思い出されます

倉持美智子さん（台東区）

谷内さんのご逝去、ビックリです。そしてとても悲しい。優しい笑顔が思い出されます。もうお目に掛かれないのかと思うと、淋しさで胸がいっぱいです。どうか安らかに……。

役員の皆様の汗と努力で

時田和江さん（横浜市）

いつもお世話になっています。同窓会、本当に懐かしいです。役員の皆様の汗と努力で、今年も無事に総会を迎えられたと思います。どうか有意義な一日を過ごして下さい。

「行ける間」は頑張ります！

小原昭子さん（船橋市）

いつも幹事の皆さん、御苦労様です。私もいつまで参加出来るか分かりませんが、行ける間は頑張ります。どうぞお身体を大切になさって下さい。総会と懇親会に出席の予定ですが、総会には遅れてしまうかも知れません。返信葉書には「賛成」で出します、よろしくね。

久し振りに参加致します

伊藤奈緒美さん（川崎市）

恒石さんにお声掛け頂いたので、総会と懇親会に久し振りに参加致します。

娘が逝って８年になります

堀江洋子さん（川崎市）

いつもお世話様になりまして、ありがとうございます。谷内様の御逝去、本当にびっくりしました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

娘が逝って８年になります。コロナ禍があり、私の癌や両膝の手術などで、なかなかの整肢療護園に行くことも遠くなりましたが、『ぱんび小屋だより』への皆様のご寄稿に励まされ、泣かされております。ありがとうございます。

谷さんとの「ジャガイモ掘り」を思い出します

阿部栄子さん（墨田区）

『ぱんび小屋だより』、いつもありがとうございます。毎年６月になると、谷さんとの楽しかった「ジャガイモ掘り」を思い出します。本当に楽しかった。良い想い出になりました。

整肢療護園に入園していた時は

早田尚作さん（相模原市）

谷内さん、安らかに。会報132号を見て、びっくりしました。整肢療護園に入園していた時は、居室やＩ病で、しばらく一緒でした。

長い間、同窓会の会長や副会長として頑張って下さり、本当にありがとうございました。

風のたより

訃　報

稲垣賢次さん（正会員）　2024年10月18日に心不全の為、永眠されました。謹んで御冥福をお祈り致します。

新しい「同窓会会員」をご紹介ください！

整肢療護園同窓会には「正会員」と「賛助会員」の２種類の「会員制度」（年会費は共に2,000円）があります。正会員は整肢療護園退園者、**賛助会員は退園者以外で、同窓会の活動に関心を持たれたり、理解を示して下さる方ならば、どなたでも入会できます。**

あなたの周囲に、まだ整肢療護園同窓会を知らない、会員となっておられない整肢療護園退園者、整肢療護園元職員、同窓会の活動に関心を持たれたり、理解を示してくださる方はおられませんか？もしもおられましたら、「同窓会事務局」までご一報ください。

ご連絡・お問い合わせは、事務局及び会計・佐々木卓司までお願い致します。

〒261-0013　千葉県千葉市美浜区打瀬1-2-3　セントラルパークウエストB-403
携帯電話　080-3343-9765、　自宅電話　043-272-4100（Fax兼用）
電子メールアドレス　stakumaco2016@yahoo.co.jp

「同窓会会費」の振込み口座について

同窓会会費は、「正会員」、「賛助会員」共に年間2,000円、振込み口座は以下の通りです。
▽郵便振替口座　名称：整肢療護園同窓会　郵便振替口座番号：00160－7－8438
▽銀行口座　名称：整肢療護園同窓会　三菱UFJ銀行　三田支店　普通預金：1039229

正会員・賛助会員の皆様への「大切なお願い」

整肢療護園同窓会の運営（会報の発行、活動）は、「会員の皆様からの会費」によって支えられております。どうか健全な会の運営のため、会費の納入にご協力ください。

どうぞよろしくお願い致します！

編　集　後　記

『ばんび小屋だより』133号をお届けします。今号の記事の内容は、いかがだったでしょうか？事務局のメールアドレスは **stakumaco2016@yahoo.co.jp** ですので、パソコンやスマホで電子メールをやられている皆様は、是非とも『お便りメール』や『会報の記事に対する感想メール』の送信をお願いします。皆様の原稿がありませんと、会報は発行できませんので。

堀江さんへの原稿依頼は、かなり前から考えていました。しかしご本人の闘病や娘さんのご逝去で、伸び伸びになっていました。谷内さんからも寄稿の話があったとは知りませんでした。

今回もご寄稿頂いた皆様のお陰を持ちまして、無事に会報『ばんび小屋だより』を発行する事が出来ました。134号以降も「皆様のご寄稿」をよろしくお願い致します。

これからも、『整肢療護園同窓会』および会報『ばんび小屋だより』を、末永くご支援・お見守りくださいますように、お願いいたします！　（情宣部・恒石浩志）

整肢療護園同窓会「ばんび小屋だより」133号
定価　200円（会費の中に含まれている）
☆発行責任者　岩井　叡覧
☆編集責任者　恒石　浩志

1977年12月3日第三種郵便物認可（毎月18回1、2、3、5、6、7の日発行）2025年7月22日発行　SSKP通巻第8742号　ばんび小屋だより133号
発行人　障害者団体定期刊行物協会　東京都世田谷区砧6の26の21　編集人　整肢療護園同窓会　東京都板橋区小茂根1の1の10　定価200円（会費の中に含まれている）